



関西発

教育 | 医療と介護 | 住まい | 大手小町 | 旅行 | グルメ | クルマ | ネット | しごと | 読書 | エ

ホーム | 社会 | スポーツ | マネー・経済 | 政治 | 国際 | 科学

関西発トップ | 暮らし | 社会 | 経済 | 科学 | スポーツ | 人遊食 | 教育 | 子育て | 文化 | 伝統 | 季節 | 自然

ホーム > 関西発 > 人遊食 > 師あり弟あり

天気 | 地図 | 買物 | 雑誌 | 交通 | 映画 | 写真 | 動画 | データベース | サイト案内 | 関西発ガイド

短歌結社

談論風発の歌会 「型にはまるな」 自由さ次世代へ

東山の峰々を望む
京都市左京区のビ
ルの一室。月1度ず
つ、お年寄りから学
生まで約30人が集
まり、短歌結社「塔」
は、歌会を開く。



妻の河野裕子さん(左)と自宅の近くを散策する永田和宏さん。師の思いを継いで「常に新しい力、若い血を」と、次世代の歌人の育成に夫婦で力を注ぐ(京都市左京区で)＝大西健次撮影

「リズムがよくない」
「きれいな情景やけ
ど、インパクトがな
い」。互いの歌を巡
り、雅(みやび)やか
な「歌会」のイメージ

とは程遠い批評が飛び交う。熱を帯びると、泣き出す作者もいるという。

歌会は歌人にとっての修練の場。だが「歌の作り方を教わるのと違って、読
みを磨く訓練の場」と主宰の永田和宏(60)は話す。参加者はそれぞれの歌
を巡る様々な意見を聞き、歌の味わい方を学んで、どんな歌がいい歌か、感
覚を研ぐのだという。

宮中の「歌会始」の選者と、歌壇では最も権威があるとされる「迢空賞」に永
田は、ともに2004年、戦後の生まれで初めて選ばれた。

京大の再生医科学研究所教授で、高温や汚染などのストレスを受けた細胞
を防御する「ストレスたんぱく質」などの世界的研究者でもある。日本細胞生
物学会長も務めた。

〈小さき脳をスライスにして染めているこの学生は茂吉を知らぬ〉

二足のわらじをはき続けてきた。

読売新聞 ▶ご購入

yorimo ▶トク

大人の部活 | ネットTV

第59回 正倉院

いまむか

PR 紫外線緊急対策
らみかんのチカラ。

PR 全536戸南向
築分譲マンション「イ

人・遊・食

- 師あり弟あり
- オイシイとこどり
- タカラヅカ発
- 四国・札所周辺
- ファッションマップ
- デジフォト講座
- 恋ものがたり

ニュース特集

合格実績水増し
兵庫・私立高4校
し

JR脱線事故
被害者らJR西に

ジェットコースター
エキスポ、小型二
停止

“丹波竜”発掘
化石発見1周年

井川の挑戦
“欲しい”と言わ

大阪市改革どこ
市、未収金 332億

阪急HD・阪神 新
阪急阪神HD 利

高松塚古墳・石室
「列島いにしえ探

なにわ編集長のい

「塔」創設者で、リルケの研究や翻訳で知られる独文学者だった京都大教授の高安国世(1913～84)に師事。ただ、歌の詠み方を直接、習うことはなかった。手取り足取り教えるより、談論風発の歌会を大事にするのが、高安のやり方だった。



永田は京都の府立高時代に詠んだ歌が新聞歌壇で特選を取った。京大入学後、京大短歌会へ。だが、歌会で先輩の口にする批評が、全く理解できなかった。自信を喪失。会を指導していた高安に「どうしたら、歌がうまくなりますか」と尋ねた。「(高安が主宰する)塔に入りなさい」と言われた。

「君はちゃんと見たんか」。師事して間もなく、高安にそうたしなめられた。アジサイの花の色が薄れていくという意味の歌をつくった時。「アジサイはだんだん花の色が濃くなっていくのに」というのだった。

「いかにものを見ず、雰囲気だけで歌を詠んでいたか」。恥ずかしくなった。

永田は大卒後、食品会社に勤めたが、約5年で辞め、京大の研究員になった。無給。研究と作歌の合間の塾講師で、妻で歌人の河野裕子(61)と子ども2人がいる生活を支えた。その最中の77年に出した歌集「黄金分割」に高安が葉文(しおり)を寄せた。

「妻子をかかえ、安定のない生活をしながら歌に命を賭ける、ということを一般的に受け取っても、それは容易でない日々の苦闘を予感させる」と書かれていた。

高安を信州にあった山荘まで車で送ったり、高安が60歳で運転免許を取ると逆に「お茶を飲みに行こう」とドライブに誘われたり。親密ではあったが、身の上や暮らしぶりまで立ち入って話すことはなかった。

それでも、師はずっと自分を気にかけ、見守ってくれたのだと、葉文に永田は力づけられた。

〈永田君歌を作れとくりかえし書きし寂しさ高安国世〉

後に永田は、師への思いをそんな歌に託した。



編集長は若手 切磋琢磨し 伸びる才能

高安は「薬の町」で知られる大阪・道修町の、江戸時代から続く医家の出身。医師を目指したが、京大に進む直前に翻し、文学を志した。

〈かきくらし雪ふりしきり降りしづみ我は真実を生きたかりけり〉

文学への思いをそう詠んだ。

[いまむかし写真物](#)
甲子園球場(兵庫)

[育児ネット](#)
病児ケア1日200

[心のページ](#)
若者よ、自分を責

[自由都市文学賞](#)
第2回・他人の垢

[京都がわかる](#)
御所言葉に由来は？

[師あり弟あり](#)
短歌結社

[陸上競技に恋し](#)
車いす競技の土

[桂三枝の川柳激](#)
川柳激情7月の





[ライフ・マネー・シ](#)
ホームベーカリー

[ネットTV](#)
“フェスゲ”閉鎖で




[大阪本社から](#)

[環境への取り組み](#) |
[派遣](#) | [グループ会社](#)

[大阪発刊 55周年](#)

- ◆ [フィラデルフィア](#)
-  [文化財保存・修復](#)
-  [賞](#)
-  [源氏物語 ～千年](#)
-  [よみうり子育て](#)
-  [おためし新聞](#)

[リンク](#)

-  [大阪よみうり文化](#)
-  [よみうり文化セン](#)
-  [YC読売センター](#)

[プレゼント](#)

[YTV「受験の神様」](#)
[「ホタルノヒカリ」図書](#)
に

[関西発のメルマガ](#)
[登録と解除、サンプ](#)



若い歌人たちとの歌会を楽しんだ高安国世さん(右奥。左端は永田さん)＝永田さん提供

母やす子(1883～1969)も歌人で、与謝野晶子(1878～1942)やアララギ派の斎藤茂吉(1882～1953)の手ほどきを受けた。高安も21歳でアララギの会員になり、土屋文明(1890～1990)に師事した。

戦後には苦しい時代もあったとされる。永田の歌集に寄せた栞文は、愛(まな)弟子に

かつての自らを重ねていたこともうかがわせる。

「塔」の創設は54年。「僕たちは短歌を愛して集まった」と、高安は「発足のことば」に記した。「自由な精神の交流を僕たちはここに期待する」と会員に呼びかけた。

師の没後、永田は月刊誌「塔」の編集・発行や結社の主宰を継いだ。

「病気になった時、先生は『塔』をやめたいと提案された。強引ではあったが、私はそれを撤回していただいた。『塔』は高安個人のものではないと、かなりきついことを言った」。永田は04年に「塔」創刊50年記念号で、そう明かした。「活気のある『塔』を次の世代へ受け渡していくことも、高安先生に対する、そして会員に対する私の責任の取り方である」というのだった。

「短歌を基礎から、教わった」。吉川宏志(38)は永田を師と仰ぐ。

宮崎市内の高校から京大文学部に進む際、国語教師だった歌人の志垣澄幸(73)から紹介を受けて「塔」の門を叩(たた)いた。

永田宅を頻繁に訪ね、短歌総合誌に寄稿する文章などを見せては突き返されて、書き直した。歌から批評の仕方まで、まねているうちに師とそっくりになった。

だが、やがて「自分は違う」との思いが膨らんだ。96年に歌壇の芥川賞とされる現代歌人協会賞、06年には山本健吉文学賞と寺山修司短歌賞を受賞。「親子と同様、師弟もいつかは距離を取る時期が来るものだと思う」と「師離れ」を語る。



歌会で出された批評をメモする「塔」のメンバー。様々な意見を歌づくりに生かす(京都市左京区で)＝伊東広路撮影

「20代の歌人は全国で1000人に1人以下と言われるけど、うち10%が20～30歳代」と、永田は若さに胸をはる。「若手に歌誌の編集長を任せるのが塔の伝統。吉川も20代でやった。リーダーが若いと、若い会員がどんどん集まって、切磋琢磨(せっさたくま)するから、成長も早い」という。

吉川のダブル受賞に続き、今年は栗木京子(52)が山本健吉文学賞と、芸術選奨・文部科学大臣賞、遼空賞をトリプル受賞。他にも最近5年で10人以上の会員が斎藤茂吉短歌文学賞や角川短歌賞、現代歌人集会賞を次々に受けた。「塔」はいま歌壇で最も注目される結社でもある。

「型にはまるな」。高安は、若い会員と話すのが好きで、いつもそう言った。「塔の自由な気風はそんな高安さんから受け継いだ」と永田。談論風発の歌会で、次の世代の歌人たちを育て続ける。

現代歌人協会賞を 親子受賞の永田家

永田家は一家4人がすべて歌人。妻の河野裕子は1969年に角川短歌賞、77年に戦後の生まれで初の現代歌人協会賞を受けるなどした。長男の淳(33)、長女の紅(32)も「塔」の会員だ。淳は出版社に勤務。紅は東京大で分子細胞生物学を研究する農学博士で、父と同様、科学と短歌の両立の道を歩んでおり、母の四半世紀後の2001年に現代歌人協会賞を受けて、初の親子受賞者としても話題になった。

一方、高安の生家は高安病院(閉鎖)。伯父の月郊(1869～1944)は文芸評論家で、ノルウェーの劇作家イプセンを最初に日本に紹介するなどした。叔父の六郎(1878～1959)は医師の傍ら、歌舞伎や文楽といった関西古典芸能についての評論家としても活躍した。高安が文学を志した背景には母や、この伯父、叔父の影響もあったとされる。高安の妻の和子(1912～98)もアララギや塔の会員の歌人だった。

「塔」 批評し合う会員1000人

「アララギ」は正岡子規(1867～1902)の短歌精神を継ぎ、伊藤左千夫(1864～1913)らを中心に08年に創刊。斎藤茂吉、土屋文明らの指導で長塚節(1879～1915)や中村憲吉(1889～1934)ら多くの優れた歌人を輩出したが、97年に終

刊となった。

「塔」は現在、会員約1000人。歌会の参加者は事前に1人1首ずつを世話人に送り、当日は全員分を無記名で並べたプリントを見て、批評し合う。月刊短歌誌「塔」の選者は、吉川宏志、栗木京子、真中朋久(43)ら6人が務めている。

文・浪川知子、文中敬称略

(2007年08月22日 読売新聞)

[ホーム](#) > [関西発](#) > [人遊食](#) > [師あり弟あり](#)

[▶ 読売新聞、THE DAILY YOMIURIの購読申し込み](#)

YOMIURI ONLINE | 読売新聞

[会社案内](#) | [サイトポリシー](#) | [個人情報](#) | [著作権](#) | [リンクポリシー](#) | [お問い合わせ](#) |
[YOMIURI ONLINE広告ガイド](#) | [新聞広告ガイド](#) | [気流への投稿](#) |
見出し、記事、写真の無断転載を禁じます Copyright © The Yomiuri Shimbun.